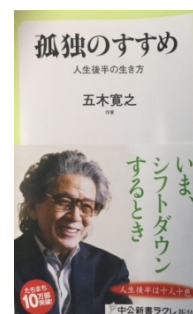


孤独のすすめ

標題は「人生後半の生き方」という副題がついた、五木寛之さんの中公新書ラクレ。ある書店で、つい手にした。なんだか「老いと孤独」を感じるためだろうか。いざ読み始めると納得することが多い。「はじめに」と「おわりに」の一部だけでも紹介したい。



老いにさしかかるにつれ、孤独を恐れる人は少なくありません。歳を重ねれば重ねるほど、人間は孤独だからこそ豊かに生きられると実感する気持ちがつよくなってきました。孤独な生活の友となるのが、例えば本です。

読書とは、著者と一対一で対話するような行為です。体が衰えて外出ができなくなっても、誰にも邪魔されず、古今東西のあらゆる人と対話ができる。本は際限なく存在しますから、孤独な生活の中で、これほど心強い友はありません。

たとえ視力がおとろえて、本を読む力が失われたとしても、回想する力は残っているはずです。残された記憶をもとに空想の翼を羽ばたかせたら、脳内に無量無辺の世界が広がっていく。誰にも邪魔されない、ひとりだけの広大な王国です。孤独であればあるほど、むしろこの王国は領土を広げ、豊かで自由な風景を見せてくれる。

歳を重ねるごとに孤独に強くなり、孤独のすばらしさを知る。孤立を恐れず、孤独を楽しむのは、人生後半期のすごく充実した生き方のひとつだと思うのです。

誰でも生きていれば、つらいことや、嫌なことは山ほどあります。しかしそういう記憶は、^{ひきだし}抽斗の中にしまったままにしておいたほうがいい。落ち込んでいる時、弱っている時は、なんともいえないバカバカしい話が逆に力になることがある。賢人の格言より、思想家の名言より、生活の中のどうでもいいような些細な記憶のほうが、案外自分を癒してくれるのです。

しかも歳を重ねれば重ねるほど、長年生きた分、そうした思い出の数は増えていくはずです。いわば頭の中に、無限の宝の山を抱えているようなもの。そうした日常生活の中でのちょっとした出会いや思い出を記憶のノートにしっかり記しておいて、ときどき引き出して「発掘」、「発見」、するのは、下山の時期を豊かにするためのいい処方箋です。そのためにも、「回想力」をしっかり育てたいものです。「玄冬」のさ中であって、ぼんやりそんなことを思っているのです。

(2017年11月20日)